思春期発達支援事業（フレンズクラブ）フォローアップ

甲南大学心理臨床カウンセリングルーム思春期発達支援事業（愛称：フレンズクラブ）は、二〇一二年度まで人間科学研究所との共催で、発達のアンバランスをもつ思春期（小学校五年生～中学校三年生）の子どもとその保護者を対象として、親子並行のグループによる支援を行ってきた。

発達のアンバランスをもつ子どもは、「友達が欲しい」というこの年齢らしい欲求を抱きながら、特性に阻まれて経験できないことが多い。子どもグループでは、子ども一人ひとりにサポーターと呼ばれるスタッフが付き添い、注意深く見守りながら、子どもたちの内発的欲求が適切に満たされることを目標に活動してきた。保護者グループでは、グループのまとめ役としてスタッフがファシリテーターを勤め、愛着がゆっくり発達してくる子どもたちと年齢相応の形で愛着を形成し、子どもの存在を受け入れつつ、適応的な行動に導けるよう、一緒に考えてきた。

二〇〇五年の立ち上げ時から先生方に相談に乗っていただき、お力を借りて、院生のみで行ってきた活動だったが、二〇一二年度で打ち切りとなった。打ち切りの際、対象上限年齢の中学校三年生になっていない子どもが二名おり、大学としての責任を果たすため、その子達が中学校三年生になるまで、希望があれば、回数、料金の設定を同様にして、カウンセリングルームでフォローしていくことになった。今年度は、二名ともフォローアップ面接への参加を希望し、前期九回、後期十回の面接を実施した。以下に、今年度の活動、および、これまでの活動全般について報告する。

今年度の活動

前期　五月十一日～七月十三日　毎週土曜日午前十時から十時五十分

参加者　中学校二年生男児と保護者
　　中学校三年生男児と保護者

スタッフ　保護者面接一名
　　子ども面接一名

後期　十月十二日～十二月二十一日　毎週土曜日午前十一時から十一時五十分

参加者　前期に同じ

スタッフ　保護者面接一名

子ども面接二名

場所　子ども　カウンセリングルーム　プレイルーム
　　保護者　カウンセリングルーム　面接室2

子どもの様子

参加している子どもは特性的に環境に左右されやすい。そのため、活動日までの生活が思うように行かないと、活動中に、体の動かし方が少し乱暴になる、道具の取り扱いがぞんざいになるなど、遊び方が荒れることがあった。その反面、トラブルなく過ごせた週は、明るい表情で、適切な態度で遊ぶことができた。

二人の子どもは長く一緒に活動してきた仲間という意識を持って、相手との活動を楽しんだようである。一人は体を使ったダイナミックな遊び方が、一人は絵を描くなど静かな遊び方が好きと、好みは異なり、時間中、ずっと同じことをしているわけではない。しかし、時々自発的に接点を持ったり、また、スタッフの声かけに助けられながら、折り合えるところで一緒に楽しむ姿が見られた。一方が休むと「同年代がいなくてさびしい」と発言するなど、相手と同じ空間にいることを大切にしたいようであった。

保護者の様子

フレンズクラブに参加した当初は、子どもの行動の背景を理解することが難しく、子どもの衝動性に振り回されがちだった保護者も、今までの活動で、子どもの特性を理解し、子どもに合わせていこうとするようになった。保護者の子どもを見る視点の変化があったからか、今年は、困った行動への対処より、子どもの成長が感じられるエピソードを取り上げることが多かった。

「自信がないから、何かをするときには母親に確認することが多かった子どもが、母親がいなくても、自分で判断して行動するようになった」、「自分は人からどう見られているかを気にするようになった」、など、好ましい子どもの変化を明るい表情で報告する姿が見られた。また、「学校で嫌がらせをする子がいるけど、相手にしないでおいたって言うから、えらかったね、それでええんよってほめた」と、子どもに必要な対応ができる自分の子育てに自信を持っている様子も語られた。

時には話題が脱線しながら、一緒に子どもの成長を確認して、喜び合う場が持てたように感じる。

まとめ

二〇〇五年に開始したフレンズクラブは二〇一三年十二月に最後の参加者を送り出し、足かけ九年続けた活動もすべて終了となった。この間で十六期開催し、のべ二十組の親子が参加した。

子どもは、フレンズクラブに来て初めて、友達と最後まで楽しく遊びきるという体験をする場合も多く、そんな体験を積み重ねることで、自分のうちにある関係を築く力に気づき、自信を持っていくようである。

保護者は、我が子の衝動性の高さにはらはらし、他の親に対して肩身の狭い思いをしたり、学校の参観日で他児と同じ行動ができない我が子が他の親の目にどう映るか気になったりして、保護者同士の交流に消極的にならざるを得なかった経験をもってグループに参加することが多い。そんな保護者にとって、フレンズクラブは、初めてほっとできる子育て共同体として機能してきたと感じている。

多くの院生がこの活動でスタッフを勤めてくれた。「お兄さんお姉さんが子どもを受け入れてくれて、どう振舞ったらよいか教えてくれるのがありがたい」と多くの保護者が感謝を述べた。また、自分だけでは人と接することが苦手でも、スタッフが助けてくれることで勇気を出せる子どもの姿を見てきた。スタッフあっての活動だった。今現場で活躍している元スタッフが「フレンズでの経験があるから、現場で少々のことがあってもあわてない」と話してくれたことがある。ここでの経験がスタッフの今後の臨床に生きてくれたら、かけた苦労が報われる。

今まで一緒に歩んでくれた保護者の方々、子どもたち、スタッフに感謝している。

（南野　美穂）